

昨年11月、日本を代表する映画俳優が、相次いでこの世を去りました。高倉健さんは悪性リンパ腫（リンパ組織の悪性腫瘍）のため83歳で、菅原文太さんは膀胱（ぼうこう）がんを患い81歳で亡くなりました。

お二人とも最晩年まで元気で若々しく、80代には見えませんでした。第2次世界大戦

がん社会 を診る

中川 恵一

後の食生活の改善などで、日本人の肉体は昔より格段に若くなりました。

しかし、がんは遺伝子の老化とよってよい病気で、年齢とともに急激に増加します。若々しく活動的な高齢者が増える「がん社会」を象徴していると思えます。

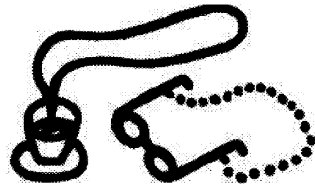
また、お二人の生活は亡く

最後まで普通の暮らし

なる数週間まで普段に近いものだったと聞いています。とくに、菅原さんには陽子線治療をお勧めした縁もあり、昨年10月に夕食の誘いを受けました。痩せていましたが、冗談を言いながら背筋を伸ばして食事をされていた菅原さんの姿が目につかびます。

いつまでも元気でピンピンとし、コロリと亡くなる「ピンピンコロリ」が日本人の理想の死に方の一つといわれます。がんに伴う痛みを和らげるなどして、高齢者ががんとうまく付き合うことができれば、まさにピンピンコロリ型になります。

死に至るまでの過程を病氣



イラスト・中村 久美

の種類ごとに考えてみると、慢性の心臓病や呼吸器疾患の多くは、急な病状の悪化を繰り返しながら、徐々に機能が低下して死に至ります。認知症や老衰では、もともと低い機能がゆっくりと、さらに低下しながら死に至ります。脳卒中などの後遺症でも似たような経過をたどる例が少なくありません。

その点、がんでは、身体の機能が比較的長い間保たれ、最後の数週間で急速に悪化する経過をとるケースが大半です。2010年に胆のうがんで亡くなった元プロ野球監督の大沢啓二さんも私が診ていました。78歳で亡くなる直前までテレビに出演し、「あっぱれ」「喝」と大きな声を出されていました。共演者も、大沢さんが末期がんだとは気づかなかったそうです。

がんは残念ながら、若くして亡くなるケースもあります。私は「ピンピンコロリとがんで死にたい」と思っています。

（東京大学病院准教授）